

〔論説〕

いわて GINGA-NET プロジェクトに引率教員として参加して

藤本 美雪¹⁾

1. はじめに

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災とこの地震により引き起こされた大津波は、東北地方沿岸部に、死者・行方不明者約2万人の壊滅的な被害をもたらしました。

この4月に本学に赴任してきた私は、看護師経験を生かし、なにか被災者に対する支援活動ができないかと考えていました。声を掛けて頂き最初に参加したのは、本学の「ボランティアサークルめいと」の活動でした。「ボランティアサークルめいと」の学生16人の引率教員の1人として、岩手県山田町に5月に日帰りで行きました。支援活動は、温かい食事の提供を行うことでした。山田町に行ったことで、自分の目で被災地の被害状況を知り、また住民の声を聞くことができました。今後も継続して復興支援に参加していきたいと考えていたので、本学の看護学科の学生が夏季休暇中の9月に岩手県にボランティアに行くことが決まった際に、2回目のボランティア活動に参加しようと思いました。このボランティア活動は、いわて GINGA-NET プロジェクトに参加して、岩手県沿岸部でのボランティア活動を行うことでした。私は本学の看護学科の学生15人の引率教員として、4日間寝起きを共にし、学生の体調管理や感情の表出の傾聴等、側面的に学生のボランティア活動を支援しました。ここでは、いわて GINGA-NET プロジェクトを通して体験したことを述べていきたいと思います。

2. いわて GINGA-NET プロジェクトについて

いわて GINGA-NET プロジェクトは、岩手県立大学学生ボランティアセンターが企画運営し、被災地の要支援ニーズと学生のボランティアニーズを効果的に結びつけるために結成されました。岩手県内のボランティア活動プログラム開発、マッチングや宿泊サポートをユースビジョン及びさくらネットが、全国の大学ボランティアセンター、および学生ボランティア推進団体と連携して、学生ボランティアの募集や送り出しを行っています。

活動期間は、7月27日から9月27日の9週間（第1期から第9期）で、参加規模は、1週間単位で毎週100

～150名程度の受け入れがあります。活動地域は、岩手県南部沿岸地域で、具体的には大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、住田町です。活動内容は、仮設住宅でのサロン活動、子ども向けの学習支援、遊び支援、お祭り等地域行事の開催支援です。

何かをしたい、自分達の力を生かしたいといった被災地に対する学生の想いと、若さや体力、曜日や時間にとらわれない自由度、現役大学生という強みを生かし、専門的な学習や多様な得意分野等の学生に内在する力を武器としています。滞在拠点は、被災地活動に比較的容易に移動できる住田町の五葉地区公民館と体育館でした。

今回参加した9月7日から13日までの第7期は、全国から学生193人と引率教職員11人の参加がありました。参加者は、各々の所属の団体毎にバスで現地の本部に集合しました。本学のバスは、9月7日の朝8時に大学を出発し、16時過ぎに現地に到着しました。



図1. オリエンテーション前の学生達

翌9月8日にいわて GINGA-NET プロジェクトの担当者からオリエンテーションを受け、チーム分けと活動先が発表されました。チームは25チームに分かれており、その日によって合同で活動する場合もありました。チーム人数は5～20人で、本学の学生は、各チームに1～2人程度でした。各チームでリーダーと保健係、食事係を決め、毎日、7時半のオリエンテーションから21時半の活動の振り返りの時間まで活動をともしました。本学の学生は、主に保健係を担っていました。振り返りの時間等に、本学の学生の様子を観察しましたが、

1) 青森県立保健大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

どの学生も積極的にチームの一員となり行動していました。



図2. 体育館での振り返りの時間

各チームには引率教職員または岩手県立大学生が1人配置され、活動場所に一緒に同行しました。引率教職員はその日により別のチームに参加することもありました。引率教職員は、被災地に2次災害（地震や津波等）が生じた時や活動先の現状把握が著しく困難である時（例、活動先がパニックに陥った時）、学生自身の健康状態・精神状態が悪化した時などに安全管理の視点で支援することを任されました。私は本学の学生に限らず、チームとともに行動することで学生とコミュニケーションをとり、健康や精神状態を観察し、傾聴や確認、共感をすることに努めました。

3. ボランティア活動を行った大槌町の被害状況

東日本大震災が発生し、大槌町も強い揺れに襲われました。加えて、この地震が引き起こした大津波とそれによって発生した火災により、町は壊滅的被害を受けました。町に隣接する自治体は、宮古市や遠野市、釜石市、山田町です。

大槌町の災害復興室ホームページより、2011年9月9日現在の人的被害状況は、身元が確認され遺族に引き取られた遺体数547人、役場に引き取られた遺体数251人、安置されている遺体数2人、行方不明者数は、583人、うち死亡届の受理件数は466人でした。平成22年の国勢調査で、大槌町の人口は15,277人だったので、人口の1割弱が尊い命を落とされたのだという事実を知りました。9月7日現在の仮設住宅の入居状況は、住宅戸数2,106戸で、入居世帯は2,014世帯、入居者は4,697人でした。

東日本大震災当日の大槌町の様子について仮設住宅に入居されている方より、携帯電話で撮影された写真や動画を見せて頂き、話しを伺いました。「津波が来るぞという知らせを聞き、自分は着のみ着のまま高台に避難した。いつもは穏やかな海岸沿いに、見る見る白い大き

な波が迫ってきた。自分も津波が来るぞと言いながら、海の様子を見ていた。この光景は地獄だと思った。地獄絵図のようだった。堤防を越えて津波が押し寄せ、家々が流され、自分の家も1秒で壊れたと思う。自分の家の屋根を見つけたが、家がどんどん集まって、自分の家につぶかって壊れていったんだよな。」と言った後、一呼吸おき、その方は、学生の顔を見ました。「地震に津波、なんでこんな火の海になると思う？」と言いながら、一枚の写真を見せてくれました。携帯電話で小さい画面であったが、その場にいた学生5人と私が、もっと近づいて、その場で食い入るように見ました。まっくらの背景に、あちこちで丸い火の玉が見えました。数か所で火の手が拳がっている様子でした。お話しを聞きながら、確かに地震と津波で火事になることが、想像できませんでした。お話しをしてくれた方は、私達1人1人の顔を見ながら、答えが分からないのだろうと判断され、話しの続きを聞かせてくれました。「地震当時は、3月やったから、まだ寒かったし、どこの家にも灯油が2、3缶備蓄していたのだな。その灯油缶が流れ出し、水よりも軽いから灯油缶が浮いていたからよ。家々が壊れて、がれきもあったし、家々の外にあるプロパンガスの本体も流れていたし、燃える要素がそろっていたのだよな。燃えている町を見てもなにもできなかった、見ているだけだった。」と言われました。表情は下向きで、言葉に詰まった様子でした。紙コップのお茶を時々飲みながら話しをしてくださいました。

4. お茶っこサロン

お茶っこサロンの目的は、別々の集落から避難し身を寄せた仮設住宅で、住民間の新しい近所づきあいを築くお手伝いをすることです。具体的には、仮設住宅の近くにある談話室等で、住民同士またはボランティアが、お茶やお菓子を食べながら、交流を図ります。いわてGINGA-NETプロジェクトの各期がお茶っこサロンを継続しており、お茶っこサロンがまだ開催されていない場所では、机や椅子、座布団、お茶セットやゲーム等を持参し、場所の設営から準備します。設営後は、サロン開催のチラシを作り、仮設住宅1軒1軒に訪問し、挨拶に回り、住民の皆さんに周知します。お茶っこサロンを訪れてくれた方々とは、学生がお茶を出して話しをしたり、子供たちと遊んだりします。

お茶っこサロンの各チームには、引き継ぎノートが作成してありました。引き継ぎノートには、各期の活動先で、どのような活動をしたのか、どのような住民の方達がおられるのかが書かれてありました。ボランティアの人は変わっても、同じ場所で同じ活動が続いていくため、活動内容を記載したノートが活動準備の手がかりとなり

ました。そのノートを手にした次の期の参加者は、自分達の前の期の活動や参加者の想いを引き継ぎながら、自分達の活動を創りあげていきます。中には、談話室に足りない物が書かれており、初日に持参する物品の参考になりました。

5. 活動先までの移動と社会福祉協議会について

各チームは毎朝6台のバスに分かれ、それぞれの活動先のお茶っこサロン周辺まで移動しました。毎朝活動前にバスで最初に向かうのは、大槌小学校近くにある社会福祉協議会でした。現在、大槌小学校には、校庭に2階建ての仮設が6棟設置され、町役場に代わる合同庁舎となり、4月下旬より窓口業務を再開し、町の中心を担っています。

社会福祉協議会は、仮設で2棟あり、その中の1棟に入り、チームのリーダー3人と岩手県立大学の学生1人と引率教員2人とで、毎朝挨拶に伺いました。社会福祉協議会のスタッフ（以下、スタッフと訳します）は、当日のボランティア団体の名称や代表者、連絡先、活動内容等を確認し、一覧表に記載します。一覧表は、入口付近に見えるように掲示されており、当日のボランティア団体の活動を知ることができます。スタッフより仮設住宅併設の談話室の鍵を受け取り、昨日の住民のニーズや本日の予定、借用物品の有無等を報告します。住民のニーズによっては、いわてGINGA-NETの学生ボランティアだけではできないことがある場合も、ここで報告します。例えば、仮設住宅ではなく、離れた所にある元の自宅の瓦礫撤去や草むしり等の要望です。スタッフからは、住民の方に社会福祉協議会の連絡先を伝えてほしいこと、連絡があれば、ボランティアを派遣して、住民の要望に応える旨が伝えられました。

社会福祉協議会仮設内の壁面には、災害後の地図があり、仮設住宅の所在や仮設で行われている町役場等の情報、住民からの要望や意見などが貼ってありました。要望や意見の中には、「蟻が多い、収納がない、バスの本数を増やしてほしい」等が明記されていました。



図3. お茶っこサロンまでの道中

6. 引率教職員の役割と大槌町の吉里吉里地区でのお茶っこサロンについて

引率教職員は、原則として岩手県立大学の学生ボランティアが同伴できない場所の引率をし、新たな地震が来た場合等の緊急時の安全確保や、避難誘導を任せられました。1日の終わりの活動の振り返り時には、引率教職員同士で引率したチームの活動等の話し合いをし、他のチームの様子や、被災地の復興状況、仮設住宅の様子等を知ることができました。

私がチームで伺った仮設住宅は、大槌町の吉里吉里地区にありました。お茶っこサロン1日目は、談話室の使用予定があり、屋外で行うことになりました。学生達は協力して、談話室の外で設置準備をした後に、仮設住宅1軒、1軒訪問し、お手伝いすることはありますかと尋ね歩きました。私は、チームの学生の様子を見ながら、談話室で行われていた就職相談会に来た方々に、お茶を出しました。以下は就職相談会に来られた方から伺った話です。

50歳代の女性は、家族4人暮らしで、仮設住宅に5月末に抽選で当たり入られたとのことでした。「運がよかったのよ。」と何度もおっしゃっていました。仮設住宅の広さを尋ねると、4畳半と4畳半、6畳に台所があるとのことでした。子供2人は30歳代とのことで、夜勤もしているの、昼間も寝ていることがあり、今までの家では広さがあったが、自由な空間がないとのことでした。それでも、体育館で避難していた時と比べると、仮設でも家だから、落ち着けるとおっしゃっていました。

30-40歳代の男性は、仮設住宅入居時の説明では、部屋にモジュラーがあり、個人で契約をすれば、電話やインターネット回線がつながるといって話して設備があつてラッキーと思つたけど、いざ申し込みをしようと業者さんに頼んだ所、NTTの回線が来ておらず、工事が必要な状態であったことを残念そうに話していました。就職先を探すにしても、インターネットや電話回線は必要で、今日は回線工事をしてもらう予定なのだと話されていました。

震災当日、水産会社で、魚のフレークを作る会社に勤務していた女性は、津波が来ると言われ、仕事を中断し避難することになり、会社に車で来ている方は、自分の自家用車で逃げる人もいたが、自分は自家用車がないので、会社の送迎車で高台に逃げたと言っていました。自宅にまっすぐ向かう人もいて、最初は自分も実家の母の様子を見てから逃げようと思つていましたが、まっすぐ会社の同僚と一緒に避難した結果、自分と同居の家族は助かったが、母が行方不明になって亡くなってしまったと言われました。母は普段から山に避難することもあったので、今回も避難していることを期待していたのだが、

今回は逃げ遅れたのか、逃げなかったのか分からないが、体が見つからないから死亡したのだろう、運命だったと思うことにしたと何度も言われました。そして、就職については、義援金をもらってはいるが、家を建てられるほどの額ではないし、仮設住宅は2年後には退去をしなければならぬので、働ける口があるのであれば、働きたいと思っていますと言っていました。

談話室の仮設住宅の作りを見て、「作りが家みたいでいいわね、うらやましいわ。」とおっしゃいました。窓に網戸がついていたり、すりガラス様で外が見えないしくみであったり、天井を見ると、電気の配線やコードがむき出しになっていないこと、玄関に入るまでも配線がむき出しでないこと等を挙げていました。

お茶っこサロン2日目は、土曜日であったため、朝10時過ぎに談話室に到着すると、待ちわびたように、仮設住宅に住む小学生1～4年生が集まって来ました。6人の中には、兄弟もおり、最初は、持参したゲームで学生も交えて一緒に遊びましたが、人数が増えてくると、それぞれ思い思いに折り紙、ウノゲーム、テレビゲーム、鬼ごっこをしたりしました。午前中はその間に、ご高齢の方が3人、肩もみをしてほしいと談話室を訪れました。学生から肩もみをしてもらい、お茶を飲みながら、小学生の子供を見て、「どこの子だ、苗字はなんだ、仮設住宅の番号はなんだ」とか尋ねたりしていました。仮設住宅は25軒でしたが、8月からの入居で1か月半ほどとまだ間もないため、同じ地域に住んでいても、顔見知りにはなっていないのだと感じました。



図4. お茶っこサロンの様子

仮設住宅内で、3世代で住んでいるお宅もあれば、苗字は一緒だが、親戚つながりではない方もいて、交流は難しいと言われていました。自分の玄関先と、相手の洗濯を干す側の窓がとても近いので、開け放しにすると中が丸見えになるので、閉め切ったままのお家もあるとのことでした。テレビの音がして人気を感じても、玄関で呼んでも出てこないこともあり、交流もしづらとおっしゃっていました。

テレビで取り上げられていた仮設住宅の中には、住宅を同じ方向に設営するのではなく、玄関を向かい合わせにするという工夫のされた仮設住宅があるそうです。実際に仮設住宅に住む方がおっしゃっていたことが反映されており、住民の立場にたった仮設住宅の設営が増えることを切に願います。予期せぬ自然災害で失った様々な人や物を考えると、残された人が幸せに暮らせるように、私達にできる範囲になるとは思いますが、これからも行っていきたいと考えます。

7. おわりに

全国の大学生と引率教職員が、災害ボランティアを通して共同生活を送り、体育館で寝袋を使用し寝泊りや食事の配給等の経験をする事は、実際に避難されていた方々の気持ちを少しですが体験することができました。ボランティア活動に参加した看護学科の学生を見て共通して、住民とのコミュニケーション力や、地域をアセスメントする力がありました。看護学科教員である私は、看護師という枠に囚われず、人としての成長、人材の育成をしていく必要があると感じました。

いわて GINGA-NET プロジェクトに参加し、4日間という短い期間ではありましたが、学生とともに考え、行動してきたことを普段の仕事にも生かせるようにと考えています。毎日当たり前のように過ごしている日常は、とても有難いと日々感謝する必要があることを、再認識させられました。

最後になりましたが、活動を支援してくださいました皆様に感謝申し上げます。そして、犠牲者の方のご冥福と1日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。